随筆

経営の散歩道

川中経営研究所
所長　川中清司

▼またもやスキャンダルで国会が空転。予算委員会は汚職追及に終始し本来の国政の論議は二の次だ。

一体いつになったら政界の浄化ができるのか。言いしれぬいらだたしさと失望を感じる。

ドロヌマ政治の根源はどこにあるのか。

▼たすき姿が「オトコにしてください」と土下座する。政策よりも義理にからめる。

ところが当選すれば糸の切れたタコのように選挙民のコントロールはきかなくなる。住民の意見よりも所属する派閥のきずなの方を大事がる。派閥の金づるに頼らねばオトコになれないからだ。

▼いまは政治家といっても仲介業のようなことをやる人が多い。大蔵とか建設とかに予算をつけさせ枠をとる。それが政治家のウデだ、運動費は当然とする傾向がある。

自民党の代議士に女性が少ない。女では弱い、地元に橋も道路もつけられない。そんなふうに思っている選挙民もいる。

▼政治家のゾルレン（あるべき姿）と、ザイン（現実）との間にへだたりが大きい。

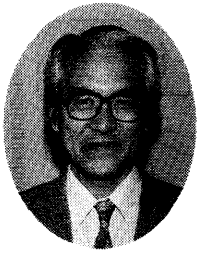
政治の展望や識見が欠ける。握手をくりかえし人に媚びて票を集めるのに汲々としている。どっしりした人生観をもつ人が少なくなった。

カネの問題をクリーンにして身辺をきれいにし自己犠牲を貫こうとしても、そんなことをしていたら当選の保証がない。

かくて政治はくさり、汚職がはびこる。

▼「いまどきカネを取引きしない選挙があるかね」

一八八〇年、ドーバー海峡に面したサンドイッチの町。腐敗した選挙制度を取り調べる裁判官のまえで、証人たちはそう言って胸をはった。



第四十五回　ただの人の倫理

いままで二人の自由党議員による無風地帯に、対抗馬が立候補し空前の買収選挙がくりひろげられた。

産業革命と貿易でばく大なカネを手にした新興勢力と、旧勢力との間にバラマキ合戦がまきおこった。

▼「選挙民にカネを贈ってなにが悪い。貢献した国民に爵位を与える制度と同じじゃないか」

町の八八軒のパブ（居酒屋）は、ただ酒をふるまう買収窟にかわった。

「先回は二ポンドだから、今回は四ポンドほしいね」と、選挙民も公然とカネを要求した。

▼このとき、法務長官ヘンリー・ジェームスは「腐敗と違法行為防止法案」をひっさげて立ち上った。

「テームズ河の流れを止めるつもりで、腐り切った選挙のしくみを変えるのだ」

ところがほとんどの与野党議員がこれに反対した。

「法律を作ったからといって腐敗がとまりはしないよ」

「労働者の多くは金をあてにしている。その現実をどうみるのかね」

▼厳しい連座制をひく。選挙事務長に不正があれば候補者も失格とする。買収犯は重く一ぱいのビール・一片のパンを与えても有罪となる――法案の内容は厳しく、贈った方も贈られた方も重罪とした。

「そんな法案は帝制ロシアかオスマントルコの野蛮国のものだ」

「ビール一杯で六ヵ月の徴役だなんて人権じゅうりんだ」と批難の嵐がうずまいた。

▼しかしヘンリー・ジェームスは屈しない。

「連座制でなければザル法になってしまう。この法律こそがイギリスの民主主義を守るのだ」と叫びつづける。

「金さえあれば議員になれる今の政治を改め、知恵のある者が国会に登場できる道を開くのだ」

二一日間の激論のあげくようやく法案は成立した。いわく、

1選挙違反者は、重労働をともなう一年の禁固刑。

1腐敗行為を犯したものは永久に立候補できず。

こうして百年たったいま、イギリスから「選挙違反」ということばが消えた。選挙費用報告書には、鉛筆一本の支出まで記載されているという。―NHKが放映したドキュメンタリーがいまも脳裡によみがえる。

▼政治の腐敗を正すには、まず選挙の資金構造から直すべきだろう。

「猿は木から落ちても猿だが、議員は落ちればただの人だ」という。しかし〝ただの人〟はどこかの長官のように何千万円もゆすったりはしない。

いま日本の政治に求められているのは〝ただの人の倫理〟ではないのか。